

浅間山周辺で火山災害を伝える「自然災害伝承碑」

天明浅間押し二百年記念碑

天明3年7月8日（1783年8月5日）、浅間山の噴火は火砕流を押し出し、大量の泥流となって村落を埋め、人馬、家屋、田畑を吾妻川に押し流した。死者は、山麓から吾妻川沿岸で1,500人に及んだ。噴火に伴う冷害等の異常気象は数年に及び、餓死者は10万人と言われている。ここ常林寺では、泥流により留守居6人と堂の建物一切が流された。



災害受難供養碑

天明3年7月8日（1783年8月5日）10時頃の浅間山の大爆発で発生した火砕流は、旧鎌原村を壊滅させ477人の命を奪った。噴火に伴う熱泥流は吾妻川を流下し、11時少し過ぎに中之条町付近に達した。旧青山村、旧市城村の田畑、人家を埋没させ、流域の被害は、流失家屋約1800戸、死者2000人余りであった。噴火活動による異常気象は数年にわたり、天明の大飢饉の要因となった。



「地理院地図」のQRコード



背景図に「地理院地図」を使用



「自然災害伝承碑」12/7時点（火山災害関連碑のみ）

大笹駅浅間碑（蜀山人の浅間やけ碑）

浅間山の噴火の影響で、天明3年7月5日（1783年8月2日）から7月8日（旧暦）まで、火山灰や岩屑なだれが麓の村々を襲った。岩屑なだれは約20km先の吾妻川に流れ込むと大泥流となり、住民、人家、山林、田んぼ等に大きな被害を与えた。



供養塔

浅間山は天明3年4月（1783年5月）から活動期に入り、7月8日（旧暦）に大爆発を起した。この影響で大量の溶岩流や火砕流が流出し、河川に流れ込み泥流となって、村々を襲った。旧総社町近くの利根川には上流から流れてきた遺体であふれ目も当てられぬ状況であった。当碑は遺体を埋葬した勝山地区に建立されていたが、災害で流失する危険があったため、現在地に移設された。

